2007

新しい日本紋様

New Japanese patterns

AD 08　乙竹　朝世
指導教員　佐久間　善典

1.研究目的

現在日本では、様々な文化の欧米化に伴って本当に良い物が忘れられ、日本文化の独自性が見失われている。海外の日本文化への関心やブーム、「和」に注目した装飾や小物の流行などがある中で、それらが本当に日本の文化を理解し、継承しているかが疑問であった。そこで、自分が現代を生きる日本人として、実際に日本文化をどう引き継いでいけるかを研究する。

2.調査と分析

幅広い日本文化の中から、グラフィックデザインの視点で「日本紋様」をテーマに選び、紋様を作成していた昔の人々の精神を調査した。ここでは実際に紋様を多く生み出した江戸時代に焦点を当てて調べた。江戸時代は、鎖国や幕府からの制圧という閉鎖的な社会の中で柔軟性を持ち、斬新なアイディアでデザインを展開している。次に日本の紋様を海外の紋様と比較した結果、江戸時代は鎖国のため、他国からの影響を受けることなく日本独特の紋様を生み続けた事がわかった。また、海外の紋様等の意匠は様々な職人によって作られたのに対し、江戸時代に生まれた日本紋様は職人だけでなく庶民たちが作ったものも多い。これを町人文化といい、非常に優れている紋様なのに、出所不明なものが多々あるのはそのためだと言われている。日本紋様の特徴は他にも平面的であること、縁起を担いだものが多いこと、日常生活で使う道具さえもモチーフにしてしまうこと等があげられる。

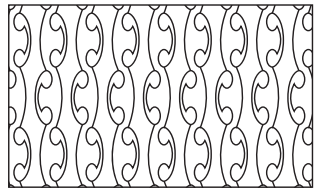
3.コンセプトの立案

『江戸時代の精神を引き継いだ、現代における日本独自の紋様の作成』。当時の人々が抱いていた「粋を求める心」「どんな状況でも優れたものを生み出していける柔軟さと斬新さ」といった心意気を汲み、日本独自の紋様の特徴とかけあわせ、現代における「日本紋様」と呼ぶに相応しい新しい紋様を作成する。

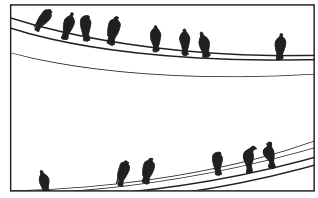
4.デザイン展開

新しい日本紋様なので、現代の生活にあったモチーフ＜家電やペット、風景など＞を使う。まず、調査分析で見いだした紋様の特徴にそってその制作に取り組んだが、決まった制約がなく自由度が高いため、あまり日本的なイメージにはならず、日本紋様とは呼べないものばかりになってしまった。そこで、新たに「日本らしさを意識する」という制約を設け、その中で形や色、大きさなどを吟味していった。また、従来の浮世絵に新しい紋様を合成し、違和感がないかどうか検証した。

5.完成図



電話



電線鳩

6.結論

作成した紋様を十代の若者を中心に見てもらったところ、「素敵、使いたい」「おもしろい」という意見を多くいただいた。しかし自分ではあまり日本らしくないと思い、失敗作にしていたものが以外に好評だったり、逆に自信作が「あまり日本らしくない」と言われたり、すべてが成功というわけではなかった。だが、当初の目的であった「日本の文化を自らが継承する」という点においては、おおむね成功したと思う。この研究に終わりはないのでこれからも続けていきたい。

7.参考文献

岩崎治子, 1984,『日本の意匠事典』岩崎美術社
西村充孝, 1975,『江戸小紋』泰流社
廣瀬辰五郎, 1979,『絶版江戸千代紙』徳間書店